

北米先住民と開拓者の文化財保護

阿子島 香

[読む館長講座⑦]

東北歴史博物館館長講座概要

2024年1月27日

「東北グローバル考古学 part3—いにしえから、今を考える—」⑦

はじめに

今年度の館長講座は、宮城県・東北地方と世界の遺跡を比較文化的に捉えて、「温故知新」すなわち現代への意義を探ります。昨年度・一昨年度の講座に引き続いて、「人間とは何か」を大きなテーマに考えていきます。また、令和3年度、令和4年度とも、各回の講座のあとに、改めて補足加筆を行ないまして、エッセイの形「読む館長講座」に再構成しました。そして、両年度分ともに、当博物館のHP上に、PDFファイルの形で公開しております。どなたでも、自由に無料ダウンロードできますので、どうぞご利用ください。

令和3年度は、人類の誕生から、日本列島へのホモ・サピエンスの渡来、そして縄文時代に至る道まで、「時代を追って」考えてみました。令和4年度は、毎回テーマを変えて、人類史の歩みから「時代を通して」考えてみました。今年度は、歴史から現在にむかって「時代を超えて」考えます。当館長の独自の視点を含めて、探っていく予定です。どうぞよろしく、お付き合いください。(初めてのお客さまに、ここまで再掲です。また東北歴史博物館講堂にて、お待ちしております。)

文化遺産と現代社会

今回も、文化財や考古学研究と、現代社会との関わりについて、考えてみます。第5回は、サハリン考古学に関して、第6回は韓国考古学に関して、私自身の研究経験を通して考察してみました。第7回のテーマは、アメリカ西部の考古学です。ニューメキシコ州、ワイオミング州、モンタナ州、サウスダコタ州での自分の研究経験に触れながら、アメリカ考古学における文化財の位置づけについて考えます。

講座の副題は(文化遺産の評価と歴史観をめぐって)としました。文化遺産のとらえ方には、その社会が持つ歴史観が、如実に表れます。講座では、対極にある遺跡や文化財を事例に考えます。「インディアン」(「ネイティブ・アメリカン」と同義。両方使用されます)が残した世界遺産(ニューメキシコ州、チャコ・キャニオン)、西部開拓時代の騎兵隊の戦場史跡(モンタナ州、リトル・ビッグホーン)などを取り上げます。

アメリカ考古学の特徴

アメリカとはどのような国であるかという問いかけには、まさに無限の多様な答えがあるでしょう。しかし、基盤にある歴史は一つの宿命となっています。それは、先住民が暮らしていた土地に、開拓者がやってきて建国したという歴史です。アメリカ考古学は古くから、広い意味での「人類学」の一分野として発達しました。日本考古学が「歴史学」の一分野であることとは、対照的です。アメリカの開拓時代からずっと、国内先住民の、歴史および現在の文化が、考古学遺跡の調査と一体になって研究が進められてきました。博物館などでは、人々の歴史というよりも、「自然史」・「自然誌」の一部として、インディアンの文化や遺跡が取り扱われたことも普通でした。私たちには違和感がありますが、これは 1980 年代までの「レッドパワー運動」（ネイティブ・アメリカンの尊厳と権利の主張）のあと、現在はかなり是正されて、多様なアメリカの構成民族として研究されています。私たちが祖先の遺跡を研究するのと同じスタンスです。なお「人類学としての考古学」には、多様な文化を比較して研究する「比較考古学」という、積極的な側面があることも確認したいと思います。（令和 3 年度館長講座概要 第 1 回「比較考古学の地平」参照）。

しかし、文化遺産がたどってきた歴史を改めて見直しますと、アメリカ各地のユニークな先住民諸族の遺産と、開拓者やアメリカ建国関連の遺産とでは、非常に重みが異なる政策（文化財行政にあたること）が取られてきました。後者に偏った政策がありました。それは、インディアン文化への扱い、すなわち米国の発展のためには消えてもらう存在とさえ思えるほどの、社会的な思潮に裏付けられていました。

ネイティブ・アメリカンの文化遺産

講座では、インディアンの歴史に触れつつ、迫害、宿命的な対立と戦争状態まで、見てみます。一方的な虐殺も起きています。平原インディアンの生活の糧であったバッファロー（野牛）には、絶滅政策が取られました。一方で、アメリカ人一般の思潮として、「フロンティア・スピリット（開拓者魂）」が根強く支持されているのも事実です。大西部開拓の歴史は、数多くの伝説やヒーローを生みだしました。西部劇映画は大きなジャンルとなり、たしかに感動的な名作も多くあると思います（館長の個人的意見）。

今回は、代表的なネイティブ・アメリカンの文化遺産として、ニューメキシコ州北西部の乾燥した高原地域に立地するチャコ・キャニオン遺跡群を紹介します。ユネスコによって、1987 年に「チャコ文化国立歴史公園」として世界遺産に登録されました。2006 年から遺産名は Chaco Culture です。10～12 世紀にかけて、アメリカ南西部の「プエブロ文化」の中心地で、大規模な集合集落を建造しました。砂岩ブロックを石器で切り出して構築し、重層階の建築を作り、天井は木材の梁で支えました。プエブロ・ボントが典型的な大集落です。キヴァという儀式用の円形建造物も目立ちます。大集落遺跡が集中するチャコ渓谷からは、直線的な道路が周囲に延びていて、広域社会ネットワークの中心でした。夏季の雷雨水を巧

みに制御して、農耕文化を発展させました。トウモロコシ、マメ類、カボチャの南西部基本型の農耕で、狩猟採集を組み合わせました。チャコ式土器は白地黒彩文 (Black-on-white) の洗練された芸術です。12世紀以後に、「チャコ現象」は終わりを告げ、気候変動が要因との説が有力です。

西部開拓時代の文化遺産

その数百年後、開拓時代の文化遺産は、全米で非常に多くが手厚く保護されています。代表的な事例として、「リトル・ビッグホーン古戦場国立記念物」(Little Bighorn Battlefield National Monument) を紹介します。この史跡は、1876年6月25・26日に、米陸軍の第7騎兵隊が、スー族など平原インディアンの連合と戦って敗北し、カスター中佐の部隊が全滅し、200名以上が戦死した場所です。西部劇映画の古典『壮烈第7騎兵隊』(1941作)の題材にもなっているので、ご承知の方も多いと思います。私はモンタナ州ミルアイアン遺跡で、13000年前のバッファロー狩り遺跡を発掘中に、単身何時間もドライブし訪問した折に、国家の偉大な史跡としての保護に強い印象をもちました。国立墓地(首都ワシントンのアーリントン国立墓地が殉国の勇士を称えて有名)も併設されています。この史跡を、インディアンの側から見直すと、どういう意義づけになるのでしょうか、講座では当時の資料を取り上げて考えてみます。

文化遺産と現代社会という脈絡で、3回の講座でお話しました。歴史を見る視点(歴史観)について、改めて考えたいと思います。

以上、当日配布のレジュメに従って、講演の要旨を述べました。以下に、いくつかのトピックを改めて取り上げて、少し詳しくご説明したいと思います。

文化遺産と歴史観

どの国を取り上げても、考古学には「お国柄」があります。考古学の資料や遺跡は、沈黙していて多くを語りません。遺跡・遺構・遺物を解釈して、モノをして語らせる学問が、考古学であるとも言えます。実証的な手続きで、過去を復元していきます。しかし今回、特に考えたいことは、その先、すなわち復元された個別の事実を評価していく際に、現代のその社会が持つ歴史観が大きく影響してきたという面です。言葉を換えてみれば、何をもって社会は文化財という評価をしてきたかという面に通じる問題です。

アメリカ考古学のお国柄として、第一に、考古学と人類学が一体となって発達してきたという歴史がまず挙げられます。このスライド写真は、ジョン・パウエル中佐が、1871年～75年の調査時に、アリゾナ州北部のコロラド川グランドキャニオン付近で、インディアンと話をしている様子です(スミソニアン機構、国立人類学アーカイブ)。アメリカ考古学の歴史を解説した本で定評のある『アメリカ考古学史』(ウィリーとサブロフ著、1974)の一節です。20世紀前半位まで、研究者たちは考古学の発掘も行なえば、民族学(狭義の文化人類学)の実態調査も行う、専門が分化した今では考えられないような、総合的な研究を実

施していました。研究対象として、考古学的な遺跡も、眼前で生活している先住民の人たちの文化も、同じカテゴリーに含まれていたと言っても過言ではないでしょう。社会の風土が、「人類学としての考古学」の基盤にあったのです。いわば、学問的な理屈よりも、目の前にある資料がそうになっていたわけです。

アメリカとは、一体どんな国か？ という大きな問いに簡単な答えはありませんが、歴史や社会についての本、論説と、暮らしてみた実感とでは、確かに落差があります。思いつくままに記せば、人種と民族の「垣塙（るつぼ）」である、多様性は無限にあり、個人が尊重される、自由が国是であり、アメリカン・ドリームは精神的支柱である、この超大国はたいへんな格差社会である、社会的な分断は近年増幅されている、などです。

一方で、現地で生活してみますと、「暮らし感覚」とでもいうのでしょうか、日常の実感があります。私は3度にわたって、およそ5年間、大西部に住んでいました。伝統的な価値が生きていて、草の根民主主義の思考、小さな町と農村の精神的伝統、人種差別の根強さ、歴史上の黒人公民権運動とレッドパワー（アメリカ・インディアン諸族）運動、自明である「自衛の権利」と銃社会などが思い浮かびます。スーパーのセールで、「今週は、銃と弾丸が、お安くなってますよ」みたいなことは、日本ではなかなか想像しにくいですが、現実でした。もちろん実弾です。

アメリカは地域による違いが非常に大きな国ですから、上記はニューメキシコ州やワイオミング州の話です。東部の都会に留学した友人は、また違ったアメリカ像、アメリカ暮らしの感想を持っています。なかば冗談ですが、「西部の田舎者よ」VS「東部の軟弱者よ」と呼びたくなる如くです。閑話休題ですが、一面の事実です。アメリカ暮らしの経験者の皆さんがいらっしゃれば、自分のいた街を思い出してみてください。人種問題も、土地によりそれぞれ大きく違います。考古学の調査の様子にも違いがあります。

さて、かくも多様で巨大なアメリカにおいて、文化遺産を評価することは、自分たちの国の歴史を評価することでもあります。今回取り上げているアメリカ・インディアンの遺跡と、西部開拓史の遺跡を対比しますと、非常に対照的な歴史観が認められます。端的に、自然の一部としての先住民の考古学遺跡、対して、現代に直結する開拓時代の文化遺産という、国民心理的な評価と言えるかもしれません。

埋蔵文化財の取り扱い

アメリカでの埋蔵文化財保護について少し見てみましょう。日本ですと、全国一律に法令のもと（「文化財保護法」）、遺跡側の身から見たなら平等に取り扱われる原則です。アメリカの場合に特筆されるのは、遺跡側の身から見たなら、どういう場所かによって、扱われ方が大きく異なるという点です。土地の管轄によって、対処する役所、機関が相異なるということです。代表的な機関を紹介してみます。

BIA（連邦政府内務省インディアン局、Bureau of Indian Affairs, US Department of the Interior）。ロゴマークは、ワシをかたどった勇壮な雰囲気ですが、この役所は、以前は、US

Department of War, Office of Indian Affairs でした。すなわち「合衆国戦争省」のインディアン局という前身でした。1824年に創設された機関とのことです。19世紀初めに、先住民がどのような国家的位置づけにあったのか、示唆するような歴史ですね。この役所は、インディアン保留地（居留地ともいう）、Indian Reservation に関する文化財を扱います。

ところで、インディアンの部族は「国家」として存続している場合もあります。信じ難いところでもあります。合衆国の歴史のなかで、相手の部族を「国家」として扱って、条約を締結したということがあり、その法的地位は現在も有効であるとのこと。私の知っている「インディアン国」の事例として、「ナヴァホ国」(Navajo Nation) があります。ある友人（白人）は、ナヴァホ国に雇用されている考古学者でした。その保留地内の遺跡の調査などを業務にしていました。公式な封筒にも「国家」のロゴがありました。

BLM（連邦政府内務省土地管理局、Bureau of Land Management, US Department of the Interior）。この役所は、国有地に関する文化財を扱います。アメリカ西部では、国有地は実に広大な部分を占めていますから、BLMに所属する考古学者が活躍する場は多くあります。私が発掘に参画したモンタナ州のミルアイアン遺跡も、国有地にありました。

NPS（連邦政府国立公園局、National Park Service）。国立公園内の文化財を扱います。次にご紹介するチャコ・キャニオンは、国立公園ですので、NPSの係官（レンジャー）たちが、世界遺産に登録されたこの遺跡群を所管します。個人的な思い出ですが、国立公園で考古学調査（サウスダコタ州バッドランドのWind Cave National Park）にも参加しましたが、制服に身を包んだレンジャーの皆さんは、なかなかステキな雰囲気でした。国民のためにナショナル・パークを守るという使命感も感じました（自然保護、野生動植物、文化財などの専門官）。

US Forest Service（連邦政府農務省森林局）。国有林の文化財を扱います。

ちなみに、これらの国立機関に所属する考古学者たちは、行政所属の中で大きな勢力です。アメリカの考古学会のうちで、最大の組織はアメリカ考古学会、**SAA**（Society for American Archaeology）です。毎年4月に年次大会が全米各地を回ります。私も1982年からの継続学会員で、コロナ禍以前には2007年から、12年間連続参加し、研究発表をしてきました。年次大会では、およそ3000件もの研究発表が行われることもあり、学会の大規模さを示します。アメリカ考古学の全体像を垣間見るには、たいへん貴重な機会です。そして大会の行事に、これら国立各機関の委員会会議があり印象的です。SAAには、連邦政府、各州政府の法令に関する動向を議論する分科研究会もあり（SAA Government Affairs）、条例や予算関連を含む貴重な情報を得ることができます。

このような行政関係の考古学者は、アカデミック（大学や研究所）関係とは区別して、**CRM 考古学**と総称されます。これは、「文化資源経営考古学、Cultural Resource Management」の略ですが、祖先の遺産を保護していくという日本の概念とは異なって、文化的な資源と捉えた考古学遺跡を、将来に向かって経営（積極的活用）していくという理念です。両国はずいぶん違います。

行政考古学とは別に、民間の調査会社も非常に多数が活動しています。毎年の SAA 大会では、このような企業が、CRM・Expo という催事で、業務実績アピールやリクルート活動を行なっています。1980 年ころにはすでに、民間の調査会社が多数あって、委託されて調査を実施していました。小規模なコンサルタント事務所的な会社から、かなり大手の調査会社までありました。この点は、日本でも近年は同じような仕組みになってきましたが、私が最初に留学した頃は、ある種の驚きでした。

当時の日本は、高度経済成長期を経て、田中角栄首相の「日本列島改造論」(1972) などもありました。埋蔵文化財保護の記録保存体制を構築するために、都道府県庁や市役所、町村役場に、専門職員を配置し、担当部局を整備するという動きの時代でした。その後、次第に自治体の関連財団化して調査が実施されるようになりました。90 年代頃でした(宮城県庁は、直営の発掘調査を守った極少数派でした)。そして、民間機関の参入と、学会での資格審査問題が出てきました。会場でお聞きの皆さんで考古学・文化財関係の方、シニアの皆さん(失礼!)はこのような歴史を実感されてきたと存じます。大学で学び始める若い世代には、現在では既に所与の体制なので、授業ではこのような歴史の経緯も重点的にお話をしてきたところです。

アメリカの場合の大きな特徴は、公有地と私有地の場合が、画然として区別されているということがあります。私有財産の不可侵は、徹底している社会で、このようなところにも表面化します。法令的には、連邦法、州法、各レベルの条例と、階層的な法令の体系がありますので、非常に複雑です。ここでは、アメリカでは考古学は、公有地ないし公共事業考古学の CRM という性格が強いことを述べるにとどめます。

またアカデミックなサイドの発掘調査は、小規模で基礎研究中心的であるという点は、ここは日本と共通しています。相違点としては、初めから全世界を対象とする学会組織、教育組織になっているということです。SAA の機関誌は、American Antiquity と、中南米を対象にする Latin American Antiquity の 2 雑誌体制であることは、象徴的です。全米ほとんどの考古学科は、人類学部に属しています。教育科目も、フランツ・ボアズ以来の総合人類学です。(古代史に属するヨーロッパ古典考古学は別ですが)。

チャコ・キャニオンの世界遺産

さて、かなり詳細にアメリカの考古学の「在り方」を見てきました。普通、海外の考古学を紹介する場合、専門誌などに発表された成果を重視しますが、実は、どこの国であっても、実際の調査に従事する大多数の考古学者がいて、社会的な仕組みの中で活動しているわけです。理論的には、プロセス考古学とポストプロセス考古学の対立などのように論じられてきましたが、現実の考古学を見てみれば、アメリカでは、極めて圧倒的に、全米がプロセス考古学のパラダイムで、大多数の研究が進められているということが言えます。アカデミックの一部が、認識論的な哲学を含む理論を議論しているに過ぎません。

次に、具体的な事例として、チャコ・キャニオンを取り上げます。(多数のスライドでご

紹介しましたが、「読む館長講座」では、割愛いたします。）

国立公園局（NPS）の管轄で、訪問者のためにネット上で現況の情報が提供されています。現在の天候、都市部から遠隔地にあるので、道路の状況などもあります。チャコ・キャニオンは、広大な荒野の中に忽然と現れる、大規模な集合集落跡（プエブロ・インディアンの祖先にあたる文化）の遺跡群で有名です。アメリカ西部の大平原地域（The Great Plains）の草原から、山岳地帯（ロッキー山脈の南部）に至る間の高原地帯、ニューメキシコ州の北西部サンホアン盆地に位置しています。標高は 1890m～1963m の間に、プエブロ・ボニト、ヌエボ・アルト、キン・クレトソなどの大集落跡が集中して分布します。キャニオン（渓谷）の長さは約 14 km あります。周辺に崖地や孤立丘（ファハダ・ビューツ）があって囲まれた地形です。気候は乾燥していて、年間降水量は 200 mm 程度で、その多くは夏季の豪雨（雷雨）として降ります。ちなみに仙台の年間降水量は、平年で 1242 mm とのことです（気象庁 HP）。余談ですが、以前にニューメキシコ大学院の友人が踏査に連れて行って来て、野営しました。彼が言うには、「今宵は、テントを張らずに露天で寝ると良い、そうすれば、太古のチャコの人々が見たと同じ、満天の星空を満喫できるよ」。で、それに従ったらその通り、暗黒の中の星空の美しさは、忘れることができません。が、遠くでは、コヨーテが遠吠えをしていて、あと怖くてテントに入りました。

チャコ現象 (Chaco Phenomena)

渓谷では西暦 1030 年頃から、集住の大規模集落が増加し、1115 年までにはサンホアン盆地に 70 集落が存在しました。それらの領域は、65,000 平方キロにわたりました。チャコ・キャニオンの中心部とは、30 集落が 6 本の「チャコ道」で結ばれ、168,000 平方キロに及びました。チャコ道は、97 km 伸びる直線道もあり、一部は 9m 幅の道がカーリーチ（岩塩を含む鉱物質）で舗装されていました。チャコは、一時的に行事や祭礼などを契機に 1 万人もが集合した場所でしたが、常時居住していたのは約 2000 人との推定があります。最大の集合集落は、プエブロ・ボニト（美しい街の意味のスペイン語）で、8000 m²に 650 もの部屋が確認され、4 階建てで、儀式を行う施設であったキヴァ (Kiva) が 36 か所あります。

チャコ・キャニオンの発掘調査は 19 世紀後半から始まっていて、1870 年代にスミソニアン機構、1896 年にアメリカ自然史博物館（ニューヨーク）などの調査があり、1907 年にはルーズベルト大統領の時代に国家記念物 (National Monument) に指定されています。1971 年にはニューメキシコ大学と国立公園局が、「チャコセンター」を設立しました。1980 年代に私は同大学に留学していて、チャコセンターの収蔵品がいろいろな場所に分散収蔵されていた記憶があります。2007 年に同大学名誉教授の名を関した Hibben Center ができて、集中保管されるようになりました。研究史が細かくてすみません。私のゆかりある地域ですので、説明がローカルになりました。（関連スライド多数）。

世界遺産に登録されたのは 1987 年で、当初の登録名称は「チャコ文化国立歴史公園、Chaco Culture National Historic Park」で、2006 年に「チャコ文化、Chaco Culture」と

改称されました。世界遺産に登録されるには、「人類にとっての顕著な普遍的価値」(OUV)が実証されることが必要です。(令和4年度読む館長講座第1回「世界遺産と縄文みやぎ」参照)。チャコの場合には、その第3項の「現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠」が実証とされました。西暦900年から1150年頃にかけての、アメリカ南西部の「プエブロ文化」の中心地とされます。砂岩の石材を、石器を使って切り出して、積み上げて数階建ての建造物を作りました。後世のように「日干しレンガ(アドビ)」で建設したプエブロではないので、現在まで良好な保存状態を保ってきました。チャコ文化は、天体観測にも優れていました。

インディアン居留地の分布

チャコ・キャニオンが立地するニューメキシコ州の北西部は、またフォー・コーナーズ地域(「四隅」地域)とも呼ばれます。これは、全米でただ1か所、4つの州が1点で接する場所だからです。ニューメキシコ州から、時計回りに、アリゾナ州、ユタ州、コロラド州です。この周辺には、インディアン文化の遺跡が非常に多くあり、コロラド州南部のメサ・ヴェルデにあるクリフ・パレス(Cliff Palace、岩壁宮殿)遺跡が有名です。また、フォー・コーナーズ地域は、現在のインディアン居留地(保留地、Reservation)が多い地域です。アリゾナ州には、米国最大部族のナヴァホ国もあります。

スライドで、全米のインディアン居留地の分布図を見てみます。米国地質調査所(US Geological Survey)によります。一見して、北東部、東部、南部に少なく、南西部、北西部に大小の保留地が集中しています。これは、インディアン諸族がもともと居住していた地域を示すものでは、全くありません。過去の不幸な歴史、すなわち東部や南部、北東部の豊かな自然の中に居住していた多くの部族が、絶滅、征服、強制移動、させられた歴史を反映しています。現在の居留地がある場所は、自然環境が多くの場合、不毛の土地(とまでは言わずとも)や相対的に豊かでない地域にある傾向は歴然としています。

インディアンにとっての、かつての豊かな地域は、「西部開拓」の進行とともに、農地や都市へと変貌しました。中西部の大農業地帯などは典型です。南東部に居住し国を作っていたチェロキー族が、強制的な長距離移動を余儀なくされ、1838~39年に多くの犠牲者を出したオクラホマに至る1300kmのルートは、「チェロキー涙の道」として記録されています。

アメリカ南西部の文化編年と年代決定

アメリカ南西部は、文化的には3つの伝統があつて、チャコ文化を含むアナサジ伝統、ニューメキシコ州南半からメキシコに至る高原地帯のモゴヨン伝統、そしてアリゾナ州南部の極度の乾燥地帯が中心のホホカム伝統に分かれます。アナサジ文化伝統の一般的な地域編年を見てみましょう。北米全体に広がるパレオインディアン文化は、大型動物の狩猟民文化で、移動生活を行なっていました。それに引き続くアルカイック文化は、完新世の温暖な気候に適応した狩猟採集文化です。

続いてのバスケットメーカー文化（第1期～第3期）の間に農耕が開始され、土器も使用されるようになり、洞窟居住から堅穴住居に変わり、次第に移動から定住の生活となります。洞窟遺跡から極度の乾燥状態で出土するカゴ類が多いので、この文化名がつけました。植物質サンダルなども出土します。その後 A.D.750 年頃から、プエブロ文化に移行しますが、5 期に分けられたプエブロ文化は、細分時期により文化内容に大きな変動が見られます。チャコ現象は、プエブロ第2期～第3期になります。A.D.1500 年以降のプエブロ文化第5期になると、ヨーロッパ人の渡来と影響が出てきます。内陸まで、先住民の間で影響関係があり、ウマが広まります。

編年表の年代がかなり詳細なことにお気づきかもしれません。これは、アメリカ南西部では、「年輪年代学」という年代決定法が発達したことに助けられています。乾燥地帯の樹齢が長大な樹種を資料にして、降水量の多寡などで生じる年輪の幅を計測して長期間のパターンを探り、出土木材の年代を決定する方法です。アメリカ南西部やカリフォルニア州で研究が進みました。近年は、日本列島でも年輪年代学が応用されるようになりました。日本列島の地域特有の年輪パターンになります。

代表的な先住民の文化遺産として、チャコ・キャニオンを見てきました。インディアン文化の遺跡の中では、注目されて調査と保護が行われてきました。しかし、文化遺産を残した人々は、19 世紀以降も「自然誌、自然史の一部」として博物館で展示されてきた存在でした。1980 年代に、「再埋葬運動」が起きました。これは、レッドパワー運動の系譜を引くもので、考古学や人類学の研究で収集された遺骨を、各部族に返還して、再び本来の形で埋葬し直すというものです。私は SAA の大会で目撃し衝撃を受けました。インディアンの伝統衣裳に身を固めた代表が、学会の壇上で「我々は、博物館の冷たい収蔵庫で、ビニール袋に包まれ、また展示されることを拒否する」と発言していました。その後、インディアン文化遺産の返還運動は、広がりを見せて、立法措置も行われ、現在では標準的な手続きになっています。

西部開拓史上の国家的文化遺産

今度は視点を変えて、開拓者の側の文化遺産に注目してみましょう。全米に散在する、合衆国建国期（ワシントン D.C.郊外にある、ジョージ・ワシントンの邸宅と農場跡、Mount Vernon は典型的です）から、西部開拓期の文化遺産は、保護の手が手厚く及び、指定物件も多く、また国民一般の高い支持も受けています。

ここでは、文化財の評価と歴史観という課題を考える材料に、ある国家記念物を訪ねてみましょう。それは、モンタナ州南部のリトル・ビッグホーンに所在する、「カスター古戦場」（Custer Battlefield）です。ジョージ・アームストロング・カスターといえば、アメリカ史上の英雄、あるいは悲劇の将軍といわれ、1876 年 6 月 25 日に、陸軍第 7 騎兵隊を率いて、インディアンと戦い、カスター部隊が全滅した事件で有名です。文献各種では、208 名、225 名、268 名戦死とあります。（講座では、スライド多数で、リトル・ビッグホーンの戦

いと、古戦場史跡の現状を解説しました)。国家記念物 (National Monument) に指定されていますが、その名称は、カスター古戦場からリトル・ビッグホーンに変更されました (1991)。

インディアン達は、リトル・ビッグホーン河畔 (インディアンの地名は、greasy, 脂ぎった沢) にキャンプしていました。キャンプといっても、もともとティーピー (Tipi, Teepee) というテントに居住して移動生活を送っていた平原インディアン諸族でしたから、通常の生活での大集団といえます。第 7 騎兵隊と戦ったのは、シャイアン族とスー族を中心にする連合戦士たちの部隊でした。戦士の人数には諸説あるようですが、少なくとも 1800 人以上、推定人数は 3500 人位の数字が多いです。女性戦士もいた記録があります。騎兵隊の全滅というこの衝撃的な出来事は、アメリカ史上の重大事件でしたから、歴史学分野で非常に多くの文献があります。講座でお話しするのは、私が実際に現地を訪ねた折の見聞と、調べた範囲に限られますのでご了解ください。

モンタナ州南東部の発掘現場 (ミルアイアン遺跡) がない日に単身、自分の車を走らせて、道路地図を見ながら行きましたが、何時間も走っても、走っても、大草原が続く直線の道路で、ようやくたどり着くと、立派な記念館があり、古戦場は国家の史跡公園として整備されていて、驚くほどでした。記念館には戦闘の展示があります。1876 年 6 月 25 日は、リトル・ビッグホーンの日 (Little Bighorn Day) という記念日で、多くのアメリカ人は、この日の名前を知っています。戦闘は 2 日間にわたりました。カスター部隊が全滅に至った場所には、石碑が多数建てられていて、解説員さんの説明によれば、それぞれの兵士が倒れた場所を示すとのことでした。兵士の名前が石碑に刻まれていました。

インディアン諸族への迫害史から

史跡公園には巨大な記念碑があつて、この史跡の意義を説明しています。また国立墓地が公園内にあり、戦死者を祀っています。これは、アメリカ合衆国の戦争に殉じた英霊という位置づけです。が、どのような範囲の「英霊」がそこに埋葬されているのか、確認できませんでした (戦争の範囲、年代、人種などについて)。というのは、この頃までに、アメリカ西部では、インディアン諸族に対する軍隊の残虐な行為が続くようになり、大規模な虐殺も何度もあった、そのような土地にあるからです。

第 7 騎兵隊全滅のあとでも、最大の虐殺事件としては、1890 年 12 月 29 日の、ウーンデッドニー事件がありました。サウスダコタ州のパインリッジ・インディアン居留地で、スー族 (Lakota Sioux) の、女性や子どもを含めて約 300 人が殺され、正確な犠牲者数は、今も不明です。講座では、虐殺後の現場の写真をご紹介しましたが、埋葬もされずに放置された遺体が、凍結した大平原に転がっている状況は、正視に堪えない感があります。私はまだ訪ねる機会がありませんが、この現場はインディアン諸族にとっての慰霊の聖地となっています。

この当時、平原インディアン諸族の間で、ある信仰が広まっていました。「幽霊踊り」

(Ghost Dance) として知られ、バッファローが再び戻ってくるという強固な信仰を伴い、このダンスの衣装を身に着けると、銃弾は弾き返されるとも信じられたということです。

リトル・ビッグホーンの戦闘以前では、1864年11月29日に起きたサンドクリークの虐殺が有名です。コロラド準州にあります。シャイアン族とアラパホ族が無抵抗で白旗や星条旗を掲げたが、数百人が惨殺され、兵士が遺体の一部分を切り取るなど信じがたい蛮行が記録されています。また、スライドは、同じ頃1868年に、カンザス州ドッジ砦付近で撮影され、バッファロー狩りの男（白人）が、シャイアン族と遭遇して殺され、頭の皮を剥がれたという写真です。スライドであまり大きく画面に出すのは控えています。昔、西部劇映画で聞いた「頭の皮を剥がされるぞ」というセリフを思い出しました。しかし、こういう行為は、白人が始めたとも言われ、コロラド州では有志の寄付でインディアンの頭皮に懸賞金を付けたという記録もあるとのこと。私はこれらの状況の真偽や程度を判断できませんが、白人たちとインディアンの間が、戦争状態に近かったことは歴史的事実です。中でも、シャイアン族などの平原インディアン諸族は、騎馬と銃による戦闘に優れていました。この写真は、1865年にネイティブ・アメリカンの首長たちが正装したようすで、戦士のいでたちで戦闘斧（トマホーク）を手にしています。カスター部隊と戦ったのも、このような部族が連携していた戦士たちでした。平原インディアンたちの生活のすべてに資源となっていたバッファローが、極端な絶滅政策のもと、実際に絶滅の瀬戸際まで減少していった時期でもありました。これら野牛がいなくなれば、インディアンの生活自体も破滅に至ります。

カスター部隊の戦い

カスター部隊長は、1874年頃から、サウスダコタ州などで作戦（キャンペーン）を進めていて、この写真は同州ブラックヒルズ地域での遠征のキャンプのようすです（米国立公文書館所蔵）。高地プレーンズ（モンタナ州、ワイオミング州、サウスダコタ州）では、インディアンとの緊張が高まっていて、リトル・ビッグホーンの戦闘前後では、カスター部隊長が、功をあげていたという歴史家の指摘もあります。カスターは部隊を3隊に分けて、北へのルートをとってインディアンの戦士たちに突入しました。もう2隊（レノ隊とベンティーン隊）は、南側でインディアン隊に阻まれて、カスター隊は孤立しました。（地図はノースウェスタン大学アーカイブス）。

アメリカ絵画に、カスター隊長の最期を描いた作品がいくつもあります（スライド）。一見して、美化された表現もあります。一方で、インディアン側のアーティストが描いた戦いの絵画作品があります。たいへん素朴な表現です。また、バッファローの皮をキャンバスとして、インディアン戦士が騎兵隊に勝利しているシーンを描いた資料もあります（国立スミソニアン、アメリカ・インディアン博物館所蔵）。

1980年代に、戦場史跡の考古学的調査が、多くの市民ボランティアの協力を得て実施されました。金属探知機を使用して、銃弾を回収し、戦闘の実際を復元していく試みでした。インディアンたちは、当時の新型連発銃を使用していたことが判明して、話題となりました。

騎兵隊の主要な銃は、スプリングフィールド・ライフル銃といって、命中率が良い元込め銃（手元から弾丸を装填する方式）でした。単発銃です。旧式銃は先込め銃です（銃身の先から弾を込める）。当時の連発銃は、ヘンリー・ライフルとかウインチェスター・ライフルで、命中率はスプリングフィールド銃に劣りますが、しかし騎馬で突撃する平原インディアン戦士にとっては、連続発射は大きな利点となりました。

騎兵隊の主要な拳銃は、コルト社製の連発リボルバー（回転弾倉式）でした。コルト・リボルバーは、西部劇でもしばしば登場します（ガンマンたちの銃）。（スライドで、これら銃を説明）。何かマニアックな話題のように聞こえるかもしれませんが、先ほど説明しました銃社会のアメリカでは、この種の話はたいへん人気があります。日本の歴史でも、幕末から明治維新ころにかけて、西洋の各種新式銃が大量に入ってきた話題は、歴史好きのみなさんにもお馴染みかと思います。ちょうど、アメリカの南北戦争が終わって、大戦争後の銃器商人の行き場所として日本列島があったというわけですね。

激動の大西部

大西部の 1840 年から 1890 年頃までの約 50 年間は、アメリカ史の中でも激動の時代でした。合衆国全体では、工業化と南北戦争を含む時期ですが、西部開拓という面では、開拓農民層の西進、すなわちフロンティア線の消滅への動き、最初の北米大陸横断鉄道の開通（1869、ワイオミング州ララミー経由）、鉄道網の拡充に先立つ「駅馬車」と「カウボーイの時代」、カリフォルニアに始まる「ゴールド・ラッシュ」（1848 年から）、牧場主と開拓農民の対立などが、一気に起きました。後に大西部のさまざまな物語として、多くの伝説的な歴史のストーリーが語られ、文学、絵画、そして映画、テレビなどでも、市民に親しまれている世界の舞台で、その多くはこの頃の出来事でした。アメリカ人の多くが「フロンティア・スピリット」の源流として想うのは、この時代が中心といえます。西部のあちこちに、「砦」（とりで）が置かれました。ララミー砦は、1840 年の設置です。交易所でもあり、騎兵隊が駐屯していました。巨大な材木列の塙で囲まれ、門には櫓（やぐら）があり、防衛していました。

春にミズーリ州を出発した幌馬車隊は、冬が来る前にロッキー山脈を越える必要がありました。隊列を組んで、未来の居住地を目指して、西へと進みました。太平洋岸のオレゴンへ向かうルートは、オレゴン街道（Oregon Trail）と呼ばれました。私が訪ねた史跡の一つに、「レジスター・クリフ」（記名者岩壁）があります。何千台という幌馬車隊のワダチが残されているルート上で、比較的軟質の岩の崖（砂岩や凝灰岩質など）の表面に、西へ向かう開拓農民たちが、自分の名前（日付などもあり）を刻んでいった史跡です。残した人々（庶民です）の姿が想像されました。また別の機会には（ニューメキシコ州）、すでに廃墟となった駅馬車のステーションが、荒野の中にそのまま打ち捨てられている場所を訪ねました。

西部開拓の背景になった法令のひとつが「ホームステッド法」（Homestead Act）でした。1862 年に施行されたもので「自営農地法」と訳されます。リンカーン大統領による南北戦

争の最中の政策で、開拓農民は、一家あたり 160 エーカー（東京ドーム 14 個分位）の農地を、5 年間、維持改善すれば、無償で提供されるというものです。今回考えた地域よりも東部（プレーリーという大草原が広がる中西部など）でも、大きな開拓推進策になったとされます。日本でも人気のあったテレビ番組の「大草原の小さな家」シリーズは、そのころから以後の中西部、西部を描いたものです。物語でのローラの家族など、思い出される皆さんもいらっしやるでしょうか。

おわりに：いにしえから今を考える

その同時代に、インディアンたちとの軋轢（あつれき）は、最大の危機的状況となって、多くの戦争状態が発生していました。講座では歴史的な事実の一部を見てみました。歴史の大きな流れは大河のようなもので、そこに生きている人々それぞれにとっては、いかんともすることができない背景として存在します。個々の人々は、特段の悪人というものではありません。大きな流れの全体をおそらくは見ることもなく、身の回りの生活を過ごしていたようすを想像できると思います。このような大きな歴史の流れの力と、個々の人間の暮らしとということを考えてみますと、実は現代社会におきましても、同じようなパターンがあることに思い至ります。日々の生活や、周りの出来事が、いったいどのような流れの中にあるのか、思いをめぐらすこと、これが重要なのだと感じます。そして、ここにこそ、私たちが歴史学を学んでいく、その大きな意義があるのではないのでしょうか。講座では、5 回、6 回、7 回にわたりまして、このような「抗しがたい、大きな流れの力と、その中での日々の出来事」という脈絡でも、お話をしました。あらためて、「いにしえから、今を考える」意味を、一緒に考えて来ることができましたなら、うれしく思います。

ご清聴まことに有難うございました（最後までお読みいただき、有難うございました）。

（本稿は、講演内容に補足したものです。なお参考文献は、日本語のものから選択していません。）

参考文献

- 阿子島香（1988）「プロセス考古学と社会的背景」『考古学ジャーナル』No.296、2-6 頁。
阿子島香（1989）「北米最初のバッファローハンター」『考古学ジャーナル』No.300、2-6 頁
阿子島香（1996）「人類学としての考古学」と文化財『考古学の方法』1 号、2-4 頁、東北大学考古学研究会。
ウィリー, G.・サブロフ, J.（1979）（小谷凱宣訳）『アメリカ考古学史』学生社。
猿谷要（1982）『西部開拓史』岩波新書。